

鑑賞の授業のための名曲&名盤〈クラシック〉

国土潤一

シューベルト「魔王」 D328

フランツ・シューベルト（1797～1828）は、そのわずか31年の短い生涯の間に、600曲以上の歌曲を作曲した。彼が「歌曲の王」と呼ばれているのは、その歌曲の膨大な量と質の高さに由来している。その詩に対する真剣で真摯な共感、つねに素朴かつ率直であり、能弁で美しい旋律を生み出している。歌詞の抑揚の自然さも、その旋律に強い説得力を与える要因となっている。これらの歌唱パートに加え、ピアノ・パートの発言力と表現力の増大は、歌曲という小宇宙の内容の密度を極限にまで高めているのだ。

シューベルトの「天才性」は、1814年10月19日、17歳の時に作曲された『糸を紡ぐグレートヒェン』ですでに示されている。翌1815年には、この『魔王』が誕生する。友人ヨーゼフ・フォン・シュバウンの証言によれば、この曲は11月16日に、短時間で書き上げられたという（これには異論も存在している）。ゲーテのバラードを音楽化したものではクラインやライヒャルト、そしてカール・レーヴェのものも知られており、ゲーテはシューベルトの作品に興味を示さず、レーヴェのそれを高く評価したとも伝えられている。しかし、このシューベルトの若書きの傑作の多彩な表現力の魅力は、歴代の多くの名歌手たちによって証明されている。鑑賞に当たっては、各人に歌詞対訳を見せながらの指導がほしい。歌手の解釈の比較も興味深いだろう（特に終わりの一言の表現！）

ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ（Br） ジェラルド・ムーア（pf）
【ユニバーサルミュージック POCG30118】

イェルク・デムスの伴奏での1959年の録音とジェラルド・ムーアの1966～67年の録音による、シューベルトがゲーテの詩に作曲した歌曲が24曲収録されたアルバム。『魔王』は、ムーアによるもので、全盛時のフィッシャー＝ディースカウが、ムーアとともに収録した《シューベルト歌曲全集》からの演奏。ゲーテのバラードを歌曲化する際に、シューベルトは語り部、父と子、そして魔王の娘の四人の声を一人の歌手のために作曲した。この歌い分けが、この曲の鑑賞のもっとも面白いところだが、フィッシャー＝ディースカウの多彩な歌い口は、描写力において傑出している。

ヘルマン・プライ（Br） カール・エンゲル（pf）
【ユニバーサルミュージック POCL3330】

フィッシャー＝ディースカウとともに20世紀後半のドイツ音楽界を支えたバリトン、ヘルマン・プライは、天与の甘やかな美声と自然な歌い口が魅力であった。1964年に名ピアニスト、カール・エンゲルとともに録音したこの『魔王』も、そんなプライの歌の魅力に満ちている。フィッシャー＝ディースカウの華麗な歌い口が、余りにも人工的に感じられる聴き手には、このプライの、劇的な力に満ちながらも、素朴な歌の味わいも失っていない歌唱は特にお薦めだろう。ソロ・ピアニストとしても定評の高いエンゲルの伴奏も秀逸で、その完成度は高い。

マティアス・ゲルネ（Br） アンドレアス・ヘフリガー（pf）
【ユニバーサルミュージック POCL1834】

フィッシャー＝ディースカウの引退、プライの早逝の後のドイツ歌曲の屋台骨を支える存在へと成長しつつあるのが、バリトンのマティアス・ゲルネだ。フィッシャー＝ディースカウやエリーザベト・シュヴァルツコップといった名歌手の薫陶を受けたゲルネは、その師が築き上げたドイツ歌曲の歌唱世界を、更に進化・発展させた表現を試みている。この『魔王』は1996年、ゲルネ29歳の録音である。若々しい声と、若さに似合わぬ老練な表現力は、師フィッシャー＝ディースカウとプライの双方の魅力を融合したような味わいを示している。

リスト編曲版：ヘルマン・プライ（Br） 岩城宏之（指揮）オーケストラ・アンサンブル金沢
【ユニバーサルミュージック POCG10012】

シューベルトの歌曲は、ブラームスやリスト、レーガー、ウェーバーン、ブリテンといった作曲家や、モットル、ワインガルトナーといった指揮者が管弦楽伴奏に編曲している。この『魔王』は、ピアノのヴィルトゥオーソにして作曲家として知られたフランツ・リストによる編曲。ピアノの3連符の連打は難技巧で、シューベルト自身は上手く弾けず、8分音符2つに直した簡略伴奏楽譜も残されているが、オーケストラならば心配はいらない。リストの編曲は、曲の劇的な起伏を見事に描き出している。

ベルリオーズ編曲版：アンネ・ゾフィー・フォン・オッター（Ms） アバド指揮 ヨーロッパ室内管弦楽団【ユニバーサルミュージック UCCG1148】

『魔王』は、バリトンによる録音が圧倒的に多い。テノールでは音色の使い分けが単調になるか、あざとくなってしまうことが多い。女声の場合も、何故か名唱は少ない。メゾ・ソプラノの名手、フォン・オッターは女声によるこの曲の歌唱の中では随一の名唱と呼ぶべきもの。その成功は、ピアノ伴奏ではなくベルリオーズ編曲によるオーケストラ伴奏に負うところも大きいだろう。リスト編曲よりも、更に色彩的で雄弁なベルリオーズの編曲は美しい。この両者の比較は、ドイツとフランスのオーケストラの色彩の趣味の差を知る上でも興味深い。

レーヴェ《魔王》
ヘルマン・プライ（Br） ギュンター・ヴァイセンホルン（pf）
【東芝EMI TOCE11035】

ドイツ歌曲のひとつのスタイルである「バラード」の完成者として、カール・レーヴェ（1796～1869）の名は、1歳年下のシューベルトとともに音楽史のなかで燦然と輝いている。『魔王』は1818年、22歳の時の作品である。シューベルトの『魔王』はこの3年前に作曲されているが、出版されたのは1821年であり、世に出たのはレーヴェのものが先であった。シューベルトに比べてはるかに直截な表現法を用いたこの曲との比較は、同じ詩による創作の可能性の広がりを教えてくれる。